

会 議 録

会議の名称	平成30年度第5回富士見市社会教育委員会議
開催日時	平成30年10月15日（月）午後7時～9時
開催場所	全員協議会室
出席者	搦木道代議長、本間雄一副議長、荒川照子委員、板橋三宏委員、岡野雅一委員、京谷恵子委員、佐々木真理子委員、古澤立巳委員、吉田徹子委員、吉田廣子委員 事務局
欠席者	なし
公開・非公開	公開（傍聴人 1人）
会議次第	1 協議事項 ・ハイティーン世代の実態について 2 報告及び連絡事項
会議資料	定期刊行物
会議録確認	搦木道代委員

会 議 内 容 (要点記録)

1. 開 会

○議長あいさつ

2. 報告

内容：「子どもの夢つなぐ市民運動☆ふじみ」始動フォーラム
日時：平成30年10月6日（土）鶴瀬コミュニティセンター
講演：「なんとかする」子どもの貧困～子ども食堂の現場から～
→社会教育委員3名出席。報告（レジュメ参照）。

3. 協議事項

- ・ハイティーン世代の実態について

議長より、これまでの協議の流れと資料②の分類図について、説明を行う。

【委員】分類だと「ハイティーン」「地域・コミュニティ」「大人」になっているが、「大人」が「地域・コミュニティ」に一部しか関わっていないというのも不思議な気がする。理想のところ、ハイティーンを地域や大人が包含するイメージではなく、それぞれの3分野の重なる部分を、どんどん広げていくイメージが理想として好ましいように思う。ハイティーンに関わりも大事だが、大人もつながりも大事と感じる。

【委員】今日は子ども食堂の話からスタートしたが、公共施設などを利用して子どもたちが集う場を作っている。その場に、地域の大人も関わっているわけだが、大人だけでなく、地域のハイティーン世代が手伝いに来てくれると、この図の重なっている部分になるのだと感じる。小中学生からすると、地域の大人、比較的高齢な方が関わる一方で、より小中学生に年齢の近い世代が関わるのとは受け止め方も全く異なると思う。そこに、ハイティーン世代の役割や存在意義があると感じる。そのため、大人がそのような受け皿を作ると同時に、ハイティーン世代が関われるような場を支援していく必要があるのではないか。

【委員】図の中で3つが関わっている部分に該当する事象は、何があるか。

【委員】公民館での宿泊事業は、該当してくるのではないか。

【委員】先日の地区体育祭などは、とても良い場だと感じた。綱引きを例に挙げても、一生懸命になり、「ウチの子ども連れてくる！」など、一つの目標に向かって世代を超えて参加できると思った。そのような場を、次に生かせるるととてもよい。

【委員】町会対抗で行っているところもあるが、町会の中でも、顔が見られる関係ができてくる。

【委員】事例が何かあると、イメージができると感じた。

【議長】次回会議が12月になるため、まとめ方について宿題をお願いしたいと考えている。

- 【委員】身近なハイティーンで思うのは、呼ばれないと行けないという傾向があるように思う。地域行事はどちらかというと、大人の要素が強い。大人から「今日だけ手伝ってくれないか」と頼むと請け負ってくれる。地域行事はひとつのポイントだと思う。餅つきや祭り、防災にしても、顔が見えない＝呼びかけの選択肢として、大人側もあまり考えられていなかったのではと、話を聞きながら感じた。行事の時には、大人側から積極的に呼びかけを行っていかないと、入りづらい現実はあるのだと思う。
- 【議長】ハイティーンに呼びかけを行ったとして、「強制感なく自主的に参加してもらえ」状況はできるか、どうか。
- 【委員】南畑公民館でやっている怪皆亭は、子どもが自主的に企画をして、それを支援できる大人が関わっている事業がある。子どもたちも、「住んでいるところが好き」という子どもが多いと聞いた。郷土愛のようなものを育てていくことも大事だと感じる。
- 【委員】今の大学生は本当に時間がない。我々の時代は、講義を途中で出することも可能だったが、今は、講義はフル参加で毎回課題があるので、絶えずレポートに追われている学生が多い。その現実が前提としてあるわけだが、淑徳大学の学生は、単位にならないボランティアによく関わっている。理由を考えると、彼らは将来「教員になりたい」という夢があり、そのために子どもと関わるためにボランティアに参加している。将来の夢や希望、目的とセットで若者を巻き込むことが必要なのではと思った。愛着や郷土愛につながると感じたが、今年初めて西みずほ台のまつりに学生が参加した。参加の仕方として、ブースを一つもらい、そこを自由に使っていいということで任せたところ、スライム作りなどをやって、学生たちで盛り上がっていた。利益につながる屋台でなくても、子どもを楽しませるブースなど、任せて企画させると義務感なくなっているように感じた。
- 【委員】モチベーションがとても大事だと思う。地方から出て生きている学生もいると思うが、たまたま富士見市に住んだというきっかけをもって、繋がってくれる学生もいる。
- 【委員】若者に発想を任せてやらせてみるというのが、非常に大事。失敗をしたらそれもまた経験になる。
- 【委員】その場合、受け皿をどういう風に作るかというのも課題になる。
- 【委員】先日、茨城県に研修に行った。高校生の事例だが、地元の高校生が地場産の特産品を使ってメニューを考えるというものだった。これには、店舗や農家など大人も多く関わることから、支援があつてこそその成功事例だと思った。
- 【委員】食生活推進員の中でも、富士見高校生と一緒にメニューを考えるなどの話ができたことがある。
- 【委員】地域の見方も、中学生と高校生では変わってくると思う。
- 【委員】その地域で生まれ育ったという地域ではなく、高校や大学やまつりや、富士見市に何らかのきっかけをもち、愛着を持ってもらえると非常によい。
- 【委員】ふじみ野交流センターでやっている事例だが、七夕まつりで大学生にきてもらったり、未就学の子どもの事業の時に保育士を目指す大学生がきて、壁などの装飾をやってもらったり、いろいろ参加してもらっている。地域のイベントなどの他に、市内の他の公共施設でも、ハイティーンを取り込む企画な

ど考えられるのではないか。

【議長】 いろんな事例が出てくるが、その参加が一過性で終わっている部分もあり、つなげられる施策があると望ましい。

【委員】 中学を卒業した後、1年に1度くらい集まれる場があると、負担に感じないかもしれない。イベントごとに毎回だと、義務感に変わる気がする。

【委員】 10代は、自分のことに一生懸命。居場所を感じたら残ることも想定されるが、そうではない子がいることも事実。先ほどもでたが、自分から進んでまつりなどのイベントに参加することは珍しい。たまたま家において、こちらから誘うとくる。行こうとは思っても、実際動いて行くというところまで、いかないのが、現状ではないか。

次回までの課題として、資料②について、それぞれの視点でレポート。

次回会議日程

平成30年度第6回会議

日程：平成30年12月3日（月）午後6時30分～

場所：みずほ台コミュニティセンター

3. 閉 会